

1990年8月21日、チェルノブイリ救援・中部のメンバー、渡辺春夫さんと坂東弘美さんがウクライナに向けて旅立った。救援物資をもってチェルノブイリの被災地を訪問した日本では最初のNPOだった。あれから30年、長いようで短かったこの年月に、私たちが目指したものは何だったのか。

チェルノブイリ原発事故と私たち

チェルノブイリ原発4号炉が爆発炎上したのは、1986年4月26日の深夜だった。3日後に名古屋駅前のデパートの電光掲示板で初めて知った、当時の緊張は今でも忘れない。後に誤報と分かったが、「ソ連の原発爆発で二千人以上が即死した」…とあった。

放射能は名古屋大学屋上の大気中でも観測され、通常の数倍にはね上がった（名古屋大学の古川路明さん観測）。当時の日本国内では、原発建設の真っ最中。「事故が起こったらどうする？」「放射性廃棄物はどうする？」という反対派の主張に、専門家や電力会社・政府は「5重の壁で放射能は外に出ない」「廃棄物はそのうち何とかなる」と主張した。だが、今もって未解決だ。

何かしようにも情報不足だった。3年後にようやく被災地の情報が入ってきた。ソ連最後のゴルバチョフ大統領が、情報開示を始めたからだった。とにかく何かしなければ、とクチコミで友人知人が集まったのは1990年4月16日、参加者は80名だった。東海3県はもとより、長野県や富山県からの参加者もいた。団体名は「チェルノブイリ救援・中部」（以下、「チェル救」）に決まった。

その後、ソ連各地に手紙を出し、2か月後に最初の返事が来たのが、ウクライナ共和国ジトーミル州の地方紙「ジトーミルスキー・ヴィスニーク」の編集長からだった。とにかく現地を視てほしい、医薬品や医療機器が足りない、という内容だった。

外務省と交渉し、渡辺さんと坂東さんが粉ミルクや使い捨て注射器など500Kgの救援物資を持って、ウクライナ国ジトーミル州を訪問したのが8月だった。それから30年、ジトーミルの人々と私達の交流は今も続いている。活動直後にウクライナのお母さん達から届いた手紙

は、「107通の手紙」として出版された。マスコミ報道では知らない、事故処理に関わった家族の病気や子どもの状況等が、生々しく書かれていた。訪問した二人に、赤ちゃんを抱いた母親が母乳の汚染を訴えた、という報告は衝撃だった。そうした生の情報が、今も続く数々の支援活動につながった。

深刻な被害、でも逞しく生きる

現地における私たちの活動に大きな支えとなったのは、ビスニーク紙の廃刊後に出来たNPO「チェルノブイリ・ホステージ（人質）基金」（以下、「ホ基金」）と「チェルノブイリの消防士達基金」だった。この間、何人もの友人・知人を失った。「ホ基金」の代表だったU. キリチャンスキー氏は永年、私の喧嘩友達だったが、9年前に亡くなった。しかし、大学卒業後に「ホ基金」に就職したE. ドンチェバさんは、今や大活躍である。彼女には最近孫ができたという。事故当時、原発職員だったボウクンさんは文通で、事故から3日後の強制避難当時8歳だった、アヌーシカちゃんの写真を送ってくれた。そのかわいい写真は「チェル救」のパンフレットの表紙になった。一昨年、あの子がお母さんになったよ、とボウクンさんから孫を抱いたアヌーシカさんの写真をもらった。様々な病気と闘いながら母親になった彼女の喜びは、如何程か計り知れない。

最近出版した福島とウクライナのお母さん達の手紙集には、困難に会いながら如何に懸命に生きてきたかが記されている。原発事故で「生きるとは何か」が問われたのだ。

2007年からウクライナで始めた「菜の花プロジェクト」は今、福島で「油菜のさと」として花開こうとしている。チェルノブイリと福島の犠牲を経て、やっと原発は終わりの時代に入ったのだ。

（2019年7月25日 河田）